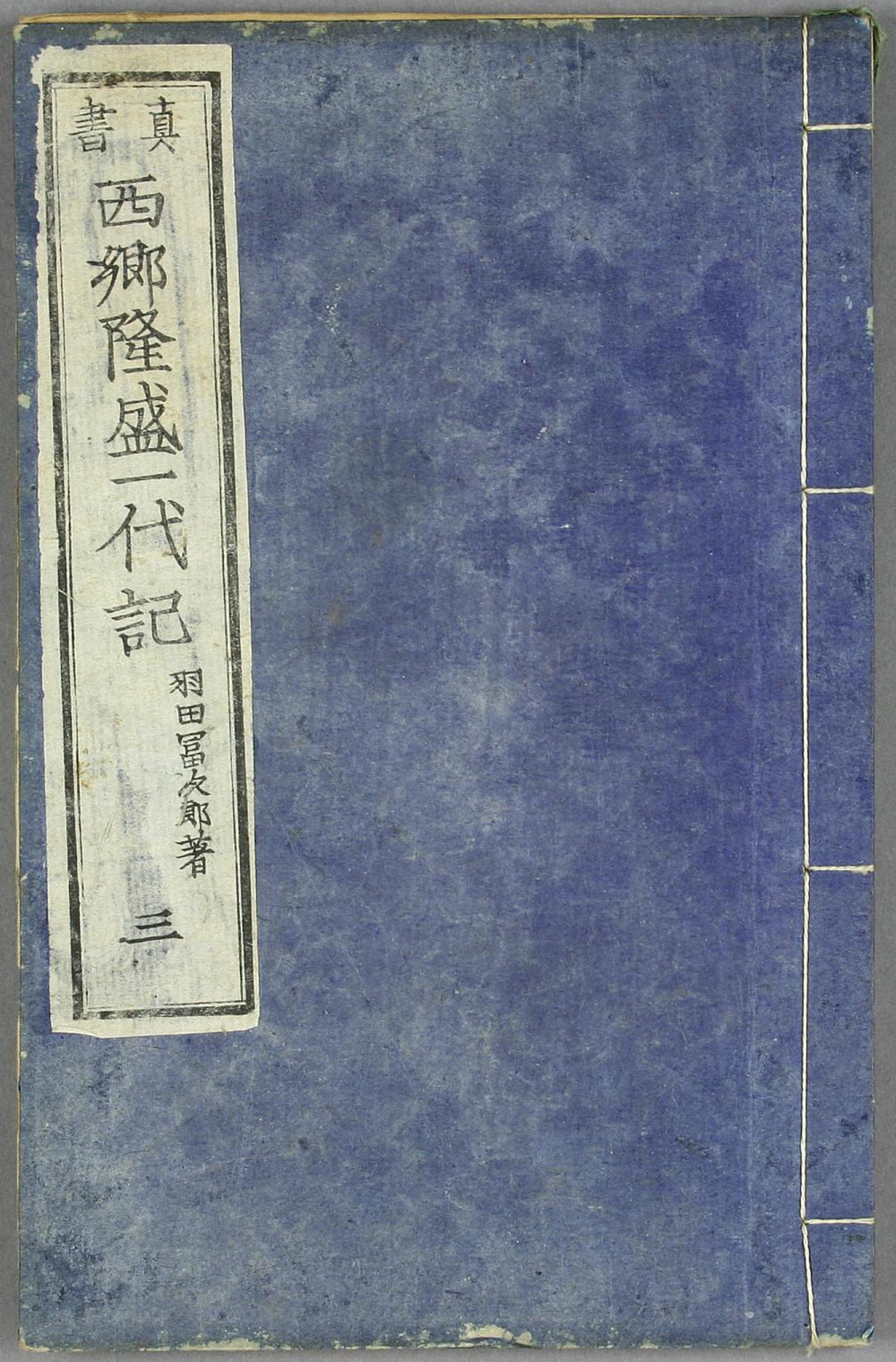


真書

西郷隆盛一代記

羽田冨次郎著

三

羽田富次郎編輯
村井静馬圖画

真書

西郷隆盛代記 三

明治十一年
二月發兌

浦野氏校

A446
3

書伝讀び古況を知り爲黄ゝて心を悦び去め乳姥の如
也さまゝび書伝讀と添乳とりふ然とる眠るとりふ書
ふ二品在亦睡人ふ二品有んろ夫書の中ふ美詩名文ふ
神を遊しめ懲ゝと眠らびゝて添乳の功と爲へし予ぶ
著を草紙の如きへ其よ況談するもの稀なるへい讀人倦
労さまて終ふ眠る是へ出もせぬ乳を拾ぶりて怨泣ふ
ゞら窠るの類いとせんろ今爰ふ顕を西郷一代記ふ先ふ
二編せゝ吉之助ゞ東の方より常陸の国ふ三編を次て
聊ゝ童子ゞ春の伽ふ俄然と眠りを醒さんとを願ふ已

明治十一年早春

笑門舎福来作

元柳橋の
藝者小志野

旧幕の秘者目付
茂木浦重蔵

長州の住人
桂小五郎後小
木戸孝允公と稱

巻中出像
房種筆

布施野の里
辯才天の別當
宝玉院の徒弟
勇天

再び説先ハ桂小五郎ハ朋友ハ伴なはんとてちらばる遊廓ハ登りて呑ざる酒を強らるとて胸の当りの穏らゐらゐ其坐を立て小坐敷ハ打卧てありける時妾ハおん湯を奈らせんと遣らハ寄そひて懐中より薬りを出し湯とくもハ与ふ奈けるゝと押載き一口のくてるへハあるゝ其人をよく見るハ我あいらたハあらゆども猶傍近く指寄て君御心如何ゆゑや於常ならぬまさび御あーゆりとも撫でちぐちんはあうあらたゞ出さるせなひと最心切ハ水抱なせべハ五郎心ハ思ひらく斯色里ハある者ハ只く薄情を常とゐをあるゞ中ハも

斯迫小誠を尽せ此女子髪の餝り衣類の模様なども
立る身なれども覚ぼえなかりしハ糸竹小て酒宴のせ[illegible]
ねかりく藝妓小てあらんづらん実小色里ハ男女の相
中をとりくどもを定めありてありしを扨置
此藝妓と久敷爰小語らべ人の疑難の影護く斯迫厚き
恵くをべ粗略小まるる小あらずども我ハとも御ミ
が上世渡る業の妨げならん人の見ぬ間小早く去り玉
ひしりかを聞よりりと笑ひうういつ押そしくて
無礼なりと思さんが妹夫の縁しハ出雲小て結せ玉ふ
と聞く君合方の在せど縁しん仮の一夜妻妾ハ賜しを

身小しあるを情を貪る者なるを小恥しをるもうち忘
る斯迫妾が言寄るを男心のつまるうりうち解なくと
斗小て跡ハ晴るる口曇る小互郎ハうとく困ト其心根
ハ我添けなりと思へとも我一ッの望みありて其上の果
さる内ハ会えるとうの返事も去ぐ〳〵上成就小及
びなべなどるおんこを外小せん必ず妻小向ひ得させ
ん先走迫ハと聞よりも恨しそる小打守り君が好きハ
妾より外なる数多増花のあるべとそを終うとと御
返事なるをハ世小なるいつの敬して遠ざく妾が上空頼うう
る言葉を未の世相て楽しまべ君ハ遥小外の色妾ハ浮世

の物笑ひ恥も恥辱も返り見ず女子の口らあらまも
ない殿子小斯迫言寄を振付られて今更小何面ぞく小
存命ん君を此世小残して妾ゞ未来の迷ひの種死出
三津をも御供なきん御免遊せ御覚語あると懐剣をら
りと稜発ちを死間もあらず切付まべ小五郎小持る
扇子りて右小拂ひ左りへ流し暫時の爭ひ婢女のうい
なる死業小似げなく打ちまく切先乱をを討込懐剣
扇子をりて小五郎丁とうちおとし厳せんとして
うるちをあらるめかゝまて女言とあり汝もの小乱い
しろ只しん憑小エ寄て我を害せん計略なるうなんぢ

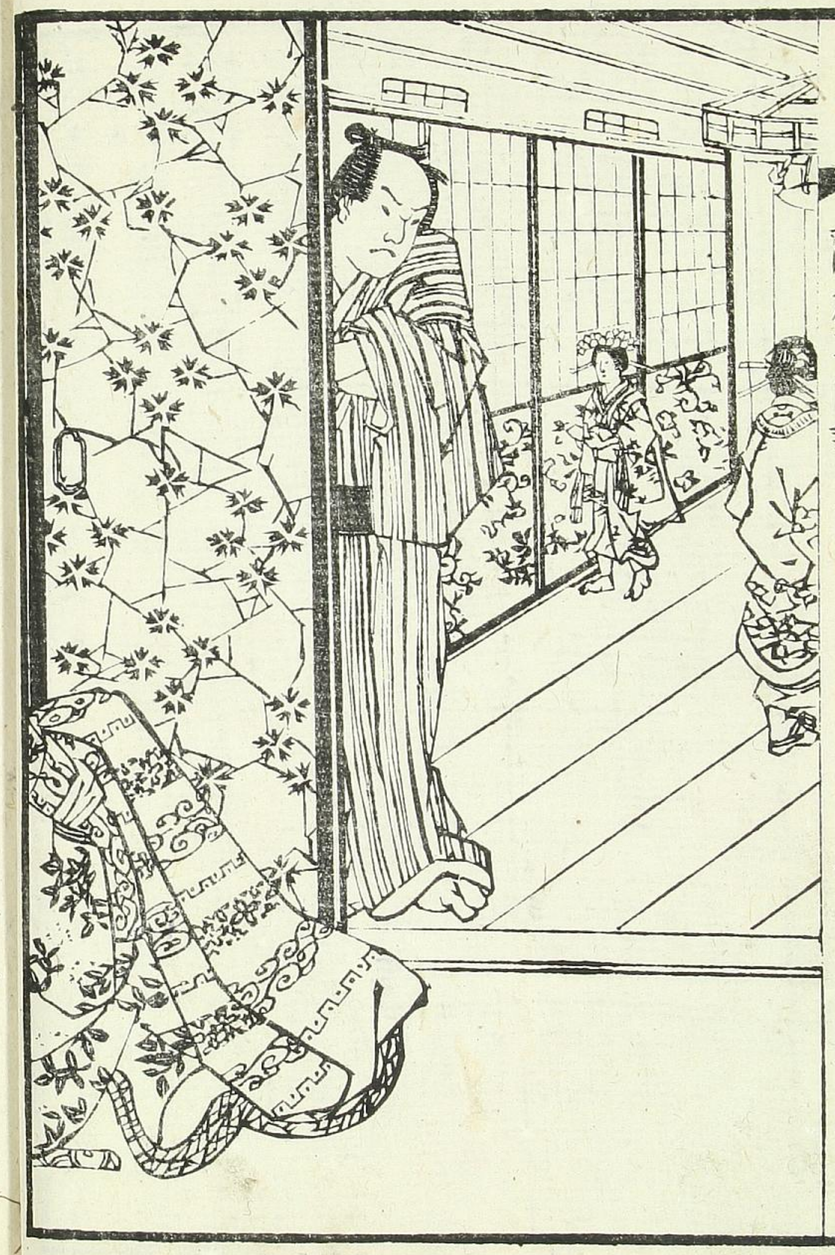
が今の刀振舞元より賤敷藝妓と覚へを様子あって紙
竹小身をかつしるうとなるべし子細包まつ明をるら
我も木竹小ならさまべ物の情をあるよしあらんと聞
より女なん遥小下り是ハ有難き其言葉手向ひなせし
妾の罪をも問せ給らせを御情け深をおん言葉今ハ何
をろ包べを妾ゞ名をべ小志野と呼ひ父ハ篠原藤六と
て元長州の人と聞故こてあらめ西国を旅寝をすして
下総の布施野ゞ里小知る人ありて久しく其所小暮せ
しがうちいゞ十の春の年弟ハいまさおさなきとろ母ハ
黄泉の人となり父ゞ手ゑれ小よりくと半年あまり

も暮せしぶ幸なりとの重りて少しの田地も賣ろうなし其代金を元手として東て業に致さんと幼なき弟を脊ふせるら負ひ妾を引て住なれしふせのくさとを引ちらひ忘るゆらぬ極月の空も朧の四月の夜小行てを急し田ゐ道小津ヶ原とろ聞傳ふ罪果極むる仕置場の地藏尊の小蔭より盗賊出て妾をけうくし非道小も父うへを刃ふうみて金子を奪ひ何国とるなゆげうせしや妾い等し問絶して様ふ小我身ふうり父上如何小ゆしまたと其場を見まび斯のまぐら肖ら小ゆおひし弟も具小釵小掛りしうと東西をしてさづぬ

まども絶て歌ねもあらさるとバ世小聞ちぐる烏べ野やうるいゆ世ゐ所ゆい人喰ふ大のありとし聞べ若やい彼小喰ふやせん我兄弟の存亡も有とも見しゐ空蟬の父い黄泉の人とゆり弟戀しゐ時鳥八千八声を泣暮き雪の夜明て旅人の妾を助けてこを問ひ所の長小訴へつ父上ゐ亡骸を形の如くふ葬らま其後妾を伴ひて東の方小連行しい糸竹をもて世を送りし唄女の主ど小て柳橋の辺りふ住居元より妾も好さる糸竹の見様みまゐ小聞習ふ後い酒楼小招うるく藝ハ我身を助けうる身の不思合と云なぐら数多の人小出合なら若や

へ父が他人のあるをさしらうに知らるゝとも其手柄り
のありあやせんと数多の席に招うまして唄ふに唄の其
うらも心の駒を引メて客の目顔や物うり其節ふ
氣を付て手元へ乱ふ三の糸三まをさよるとも親人の仇
を討まくありへども甲斐なき女子の手業にてうち捨
難く思へばこそ此中酒楼に招うまして大丈夫男子とて
るとも心にあらぬ戯のみぞ無理難題を言うけて慮
外をなしたゆめども君に増り人もなくうらん
見参の初めよりうう白地に大事と明まいらせへ
らいる心いるとも大抵精一玉ひろんるの

花よりも美しうらん君が御名をも聞まゝうまといきく
と言けるまゝに小五郎いなへ推辞に由なく誠に不思議の
値偶に依り某一謀を酒気に迴さま思を御身が抱に
成て過世あ中に長物語り一く聞一御身うへ嘸や便
なく思ふらん身へ賤しきうまを女の浮うる業に引う
へく最堅とく復仇の仇を祝らいく御身う心根実にや
土中の蓮を砌のうるの小金といへべ某一あん身が
健気なる心に恵ていうで此後に見捨んや警ひ仇人天
を駆り地を潜の術ありとも至孝天も感報在まゝあぐ
の面てい見知らづとも天人の口を以て告らまとほき



の用心
義勇を
たわらして孝
女軍事を
明らて

べいるでろ仇を免さんやうく言我もあんこゞ父と同国なる長門なる萩の里ふて成長とする桂小五郎といへる者思ひ立〳〵てありて久敷東ふありけるゞ今又水府ふ旅寐して流を寄るる今宵の見桑我を見掛て初より心底包ず大事を明を女子ふ似げなる疑心もなくその心根ふ我も愛夫好成就の門出を祝さん是漢の武帝ゞ出世鯉毛彫とるゝ刺ふ刀をべ脇刀とうて与うるべ小篠ハ嬉しゑ限りなく我身ハあろう未来ふ在父ゞ悦びいつなんと有難涙ぐふうきくゝとて咄しふ果もなゑ折ふら小五郎ゞ朋友見通坐敷ふ皆在て酒酣ふ及

〳〵うと小五郎の見へざるとハ掌を鳴して招くふぞたゞやくも爰ふ来りゝを一同見るよりうち笑ひ君雪隠ふもうまきゝろ廊下鳶をきるまるゝや如何ふ夜長の節なゞら子よとの鐘も過たらん我単も扨らふつうんさゝふも一所ふ寐らるとよと進めふ任せて小五郎も供ふ寐戸ふ入ふなり実ふ繁花の土地ハ秋の夜の長ゑと雖更安く雑り明日を告て明六ゞの鐘ふ驚ろさと書生等ハ覚出て立出んときゝりゝうバ君偖とも行水と思つべ専懐敷藝者小篠ゞ別を路ハ人目を憚て終そとと口ふ言ねど小五郎ふ又のごゝんを頼母の广空ハ晴もそも曇り

がち涙さへ霞目を拭ひとゝめうるみつゝ見送りうち扱も藝者小篠といふるハ歌舞艶曲を以て酒宴の席ハ招き糸竹ハ奥を添るといへども実ハ親の仇を探らん為柳橋ハ在し節もこの外なる繁昌ハて坐敷の数の重なきハ言込ならでハ出るこなくうちぢうの繁多なもども思ふ仇の便宜を得ざるべバ今又少しの手つゝを聞出し東の方を住替なり水府の里ハありなるゞ謀らぬも桂氏ハ便りと求め幸ひをえると雖又一ツの禍ひをうもつとりハ去べ小篠ハ桂氏ハ別きてより其後坐敷ハ出るといへども糸竹の業もてハつゝぶ只小五郎のこゝとのゝ

牡丹の角の束の間も忘ぶこゝをもて物思ふ天を瞻めて送る日の門の柱ハ身を寄て立盡せども来ぬ人を松吹風の便りもら只ひと遍も聞へねバ果ハ怨こてうちぶ歎ぶ我身一ツの登り鯉毛彫となのせ〜此刺小刀君ゞ御手ハ取らもゝ〜と思へバ専懐ケ敷慰めうるている折ゝら後辺の方ハ人ありて小篠の脊をちゝとたくきゞゆゝと笑ひし者是此人ハ別人ならぶ徳川家の御家人ハて野面非道右工門とよび元来強情貪欲ハ〜色を好ゝ己き多弁なもゝバ若者をそゝ〜のうゝ争ひを引出〜て中言を聞左右より礼物を取るの悪方ゝぶハて考ゝ已なゝぶ

掛ケ物ハ更リ己仕合悪敷時ハ夜行ハ出て追剥或ハ旅客を切害し其路金を奪ひとり只管不義の財宝を却掠ものとべ天是を悪せ玉ふ既ハ死刑とするべきを已ろ罪をあらるゝいて人の悪事を探る隠し目付とする今又水府ハさくり名を茂木浦重蔵と改名なし朝暮酒楼遊閣ハ往来し人の悪事を探んと鷹取り眼で居たる折小篠ゞ色香ハ迷ひしゝり胸のゐむらの消ゆらば思ひのさけを晴さんと目顔て知らせて言寄ゞ小篠ハ是をとるさゝ思ひうちつけふして恥ゑむもと捨てりづまハ墓ひしゝハ櫻の花ハ蝶ならて毛虫の仇ねゝまろちりて若

葉の当り喰んとさきいろゝ黒き歯をむき出し打笑ひつゝ小篠ハ向ひ此程御身ゞ人知ぬを心ハ込て慈ゑとふ其人のとゝよりも心替りの者なりしをあん身ハ知らぬらゝと門の柱ハ立暮し物思ひするゞ不便さハあん身ハ知らををありといへば小篠ハ笑何どうハ妾ハをのようる学くるをのある由なく人違ひゆあるならんといへば重蔵大ひ笑ひなるゞ女子ハ罪深しさゞど包ミ隠をなら我又御身ハ言由在過し夜を御身ゞ仇と付ねるハ絡もるあゝぬ小五郎也をを疑

〻〻思ふのハあるゝ恨をまハ庖瘡の跡もいく〻ぞとゝもる
道理ゆて御身ゞ大事を明せ〻時胸ふ一持有明の火蔭
ふ蜜〻てゝい見〻ふ彼ゝ面さ〻変り〻ハ疵持足の慥
ね證據悪逆御身を嘲ゝゝさんと讓〻品ハ七物ふて女
子の身ふ〻在なるべ仇のエハ思ひ切我戀ゝ〻も思ひ切と切物
を以て与へゝる其なぞ〻の解やらぬゞ御身の心の不
便さふ知ぬゞ佛と言なゞらあの小五郎ハ今宵の内藤
田殿の仲入ふて房の辺りの大人ふ一人娘の智とゝなり
ふ今頃ハ三〻九度四海浪も静やうふ床盃の最中ね
らん二世の堅めゝなさばとも仮初ゆも約束せ〻あの

小五郎を其侭ふ捨置エとのあるべ死や情を商ふ御身ふ
あら〻ゞと張と意気地を知るなるべ今よゝを房ふあるもむ
て此一将を明せ〻不及下重藏も尻押なゝて手切
を取るゝ品よ〻ゆゝべ親の仇討て本望達るゝ二ツなゞ
らふ上首尾なゝらんと言葉エゝふ嘱〻と常ふいうゝる
あさちゝね言葉ふ乗ぬ小篠とゝゝと此中ゝのゝく
玉ゝ心迷ひの時なるべ若やハ妾を偽りて斯なるエ
ふもなゝ〻ゝと思へば専ゞ恨め敷終踏迷ふ戀の闇ユ
の締ふ撫りけん行て恨を返さんとゝくべ重藏ゐて〻悦
びさらべ御身ハ裏口より忍び出王ひ我ハ又駕籠をゝ

闇の夜小二
勇知ぶって
争ひ盗賊を
追ふて唄女
を救ふ

らして奈るべし不可蜜よ漏なと取て返せし福住の裏口近く忍寄り相畠の飛礫違ぞ小忍び出さる藝者の小篠駕籠の戸明て入けるハ地獄落しの虎狩徒者ざ引て行野越山越へ遠くもるつ所も常陸下総の追分道の裏道なる地獄谷とて昔しより鬼住めりといひ通ふ庚申堂の前ふ来つ息杖落して駕籠ろ乙ハ重蔵ふ打向ひお約束ハ爰ふてあらん我棒組もあるの故一さと骨を折わるべ且那そとらふ如在ものゝどうぞ取してふさと きしとりくべ重蔵懐中より方位一枚取り出し骨折銭と渡をより二人ハ見向もやらぞして且那夫でハお情ない

夜中ふ及ひ野山を越息勢ひ強て駈出しわふ方位さい さ一枚とハ二人が頭ふりくらふなる三枚付た甲斐もなくなんと野中の松六よ方位一ッを受取て和主ハ是で濟を気ろ濟ぬまゝへハ頭ろら天の法度を犯しさる拙さよりも投太ひぶつとる者をちよろまろ我く二人と先張ふ骨を折らして揚坪喰ぞ不塩梅なる且那の命岡ふ辛目をもるなら恭も愚の面りの由在七年跡の雪の夜ふ夜駕籠仕舞て戻り道骨原の仕置場で一六勝負の血まゝと仕事見るふ目も暮魂ひ消し残りのとふ恐しさ小蔭ふ蜜伺ふとハ主ハ少しも白鈔ふてぞつさり旅客を殺

害ず一人で請て立退くと雪の明で見極めるを知らぞ
良して駕籠うけば方位一ッの当ゝを喰せ我輩を追拂
ひ一人で又もぞつとり者せメよふとい出がい地藏
の顔もゝ三度佛心の我ぐでも方位一ッおや返らきね
へ恐ケとくらゝせりやア熊の三社の罪を蒙り青馬う赤
馬の役ふ当りやア引廻さきそんなエふ撰ろうより我輩
を素下手と思ゝで暖ふして下さきと久悪見知ゥ難
題ふ重藏今ハさまり居ぞ一刀遥うふ引移て望の如く
述金をいで請取きと透間も非ぞ切て撰きぞうどろゝ
両人息杖取て討合ーが何で茂木浦ふ敵せんや人足二

人ハ一足出ー雲を霞と逃ふろり此時小篠ハろどの内
ふて三人の争ひ聞よりも若父うへの仇とゝいゝるい
此重藏ふて在ろるう何いとゝもあきゝ不審さい居の方ふ
連行んと妾を謀りて人もゝ名ゝ此山中ふ連ちきーハ最
狂ーゝとゝならんと駕籠の戸明て出んとゝるを重藏捕
へて描撫声ふ御身ハ我を振り捨て何国ふろ行んとゝる
やてゝも情無ゝ人殺ーと去ゝるうゝるを小篠ハ透さ
ぞ刺小刀を持て親の仇と突撰きぞ重藏ひらりと身を
うらゝ是ハいつぬ仇呼りゝ御身ハ物ふ乱ひーろ気も違
るゝぞゝと去ゝふ七年跡ハ雪の夜ふ所も違ゝぬ仕置

場で汝人を手ゐ捉へと今計づも聞らゐ果無其夜さり玉ゐい妾が父の篠原藤六面顔知らゐば仇人と言葉うらせ〜穢らゐ〜さ斯顕るゐ〜うらハ親の仇と名乗玉ひと〜〜勝負と迫りゐるとば重藏大ゐゐ嘲笑ひ狂言奇言ゐゐもありそゐ今の御身が言葉の端ゐらの知るゐる雲助が物取りゐ〜さの暴言を證據とゐ〜て仇呼ゐり近頃我も迷惑千萬身ゐ覚つゐゐ濡衣を干斤思をさせばゐも此重藏と抱ゐて寐て桂氏もそつちりと思ひ切らとゐさんゐ仇があるゐら助てもかろう討てゐ中ろうがその替ゐ後とも言ぢ今爰で仮祝言の私言人の戸絶も無山中誰も見前ゐ聞人無ろう迫我ゐ口ろ〜うせ物言ざるハ水の間より指月蔭の恥ケ敷くば庚申堂の闇ゐとよと仇ゐ〜接強嬈の二重廻りの八絲の帯其端取て引寄る此時小社の内よゐも長簪を延して重藏が襟髪むづとうい掴ゐ三間斗りも投付つ社の扉ら左右ゐ開き一固の大丈夫男立出〜り是別人ゐらぢ〜して西郷吉之助隆盛先ゐ謀ぢ行暮て此破堂ゐ宿りを求め等〜眠む其内ゐ千草と数音く出ゐらで山賊夜盗の暴言ゐ我夢を破り〜と私語ゐづら立出る折も秋の癖ゐもば今迫限ゐ月影も雨雲霞て真の暗探

出んとすゝる時先前討とゝ重藏ハ矢をとりつまふ起あゞり癒の邪ゞ矢を撃卒と足音知るべふ切付ゝ双の光りふ請流ゝ勇士の早業勇まゝく小篠もとゝ小探ようそゝうあらぬゝ重藏と思つゝ刺小刀を突撃る其下蔭を重藏ゞ右手ふひらをと身をゝうゝゝ時ゝ此處の藪蔭よゝ一固の武士顯もとゝゞ出合ゞゝらふひらゝく力先是ハ曲者と守を捻り四人ハ等しく闇の夜の鳴ぬ鳥の爭合暫時雌雄ハ見へざりしゞ小篠ハ女子の甲斐なさふ持たる刺小刀を討落されおるゝと喚ぶ折とそあゝ時ならなゝく小雷の一声烈敷鳴りたゝめゝとゝと落たる鳴神小驚ゝゝゝて四人の者思ゞ左右小散飛て稲妻陽炎水の月跡白浪とゝりふゝり爰小又常陸の国の驛路なる阿非子の宿より程近ゝ布施矢才天と申奉るハ昊現更小在して心信の者四季の絶間なゝく本尊ハ行生嶋矢才天の名身小して当山ハ水戸黄門光國卿の開基なり別当ハ宝玉院と称し堅知道德の砂門小して一人の御弟子在名を勇天と呼ひて年未少年と雖相明冷利なゝゝハ師の坊小随ひ学を生るゞ小一を聞て十を知るの性なゝゝゝゞ宝玉院も勇天を愛て我子の如くふして年月を送りしゞ宝玉院寄年浪の老びゆうゝらせしゝふゝ

ふと風の心ちより次第に重りて三度の食も進まるべ
勇天大ひ驚きて醫師を招き良薬を進め辺をちらすべ
昼夜看病つくせども其甲斐さなでなきものうら勇天
密〻頃ひて夜半に至れば境内の矢才天ゞ御手洗にて
垢離を取りて身を清め金剛妙を念じつゝ師の坊病苦
快気の程守らせ玉ひと祈れども命数美に限りあるや
天婦あらるゝにまさせども報護妙助の力に及ぶ今
は頼〻少なふなりまの死枕のうるさちに勇天をよび
ちろ付師正に命数うるありて今死んとなせば末期
に及びて言由あり汝よく記憶して忘失するなと師

沙門に入ども弟子運の拙なう常に天婦を念奉りて何
とぞ能徒弟を授け玉ひと念る三多年なりしゝ天保六
年の冬東の方に私用ありて其返るさ骨ヶ原を行〻時
人千に拙りて死者ありて其傍にあるさなきものとの泣
てありるをば是に不便なるとなるとだまし〻るし
て抱ありけるぞ天女の孤子を我に授け玉ひと乳房
あらひどふところに泣音をいぶる紀布施野にるども
らひ乳〻してよゝに育ふ付てあいちし〻我を父と
る師正とも慕るゝに身の不便さに我伝気随に育つ
どる根ゞ利發ゆゑ打捨て成長とるりてる甲斐ぐし〻

師の恩を
高く
天
室
珠
院
重病を
歎く

春咲花林
吉例寿

此程とりわけ病苦を助けいとまをめゆるし給へ生の子
ようもまるうるならんうるる男子をもちながらあん
身が父は先つ年季冬の空の雪と消へ子として仇を討
ぜんべ水竹は劣ると聞うらは御身我無その後は実父
の仇を討おふせ再び戻りて天女は仕へ無父母を初と
なし我後世とも葬ひて長く布施野は社を守り二世安
楽とそ要用なり是此品はあんくを拾ひとりし時肌身
はあらし守り候とも開き見る時はあん身が筋生も知
ぬ故はとそ必ず疑ふとなる也と手は渡さるして請お
さめ臭うちうして勇天は師の坊病は御心ようくる生

ぜると聞しうべ御心弱とと宜ぞと良薬頭用去たまい
て御全快とそ肝要なり今日の薬は典薬も一入うげん
なるべいてや煎じて参らせと水さし入し薬鍋
涼炉は掛ケて吹付る日脚も秋の短うさは無常を告る
入相の鐘て覚語をきくうりる宝玉院は眠る如く若滅
威楽とのりはうの勇天はあるはも在ぢして悲歎の涙
はうるる暮しが扱在ぢるはあらるべ師の坊病死の由
をして村中は知らせしうべうるとりしはあつまりき
て愁傷を述るゆで勇天一く撫摩は師の別とを悲くて泣
より外はなる者うら村の者も衣とを添へ慰めらと揉く

010190508116

ホ藥弐方の如くホ經營七日〳〵の追福もいと念頃ホ聖
と招き經を續せ花と供〳〵香の煙と立暮て無多ね共師の恩
血忌もいつゝ果〳〵ゝべ勇天心ホ思つゝ〳〵此程師匠の歎
とホ紛と我ホ賜る守りつゝ終打捨て置〳〵ゝ迄今へと〳〵
見て我素生見知らんと吟るホ長州萩の住人篠原藤六の
二男天保六年の延生篠原勇吉と讀終り勇天涙と拂ひ
扨ハ我実父なりけゝ〳〵ゝべ長州の産なりけゝと是〳〵ゝて
勇天當山の女才天ホ冊情と凝〳〵不思儀ゆも天婦の妙
助ホ寄水府ホ趣て西郷挂小五郎藤田小四郎の助ホ
寄実父の仇と打兄弟對面のてハ又〳〵編て續巻て延て說ぶし

明治十年
月　日御届

東京

賣捌人　福田熊治郎
長谷川町千番地

著人　平民　羽田富次郎
第十六大區八小區本所
平民　外手町二十二番地

出版人　浦野淺右工門
第十一大區一小區寺
平民　鳥村四十五番地

森屋治兵衛
馬喰町二丁目

賣捌人　平民　恵比壽屋庄七
照隆町